援助行動における行為者自身への思いやりの影響
―文字起こしを用いた検討―

松尾 朗子（東京大学 先端科学技術研究センター，matsuo.akiko.1005@gmail.com）
田中 友理（多摩大学 経営情報学部，tanaka-yu@tama.ac.jp）
勝谷 紀子（東京大学 先端科学技術研究センター，katsuya@g.ecc.u-tokyo.ac.jp）
Kuma Lab. UR Team（東京大学 先端科学技術研究センター）
熊谷 晋一郎（東京大学 先端科学技術研究センター，skumagaya@hotmail.com）

Effects of helping behavior caused by compassion on helper's psychological status

Akiko Matsuo (The Research Center for Advanced Science and Technology, The University of Tokyo, Japan)
Yuri Tanaka (School of Management and Information Sciences, Tama University, Japan)
Noriko Katsuya (The Research Center for Advanced Science and Technology, The University of Tokyo, Japan)
Kuma Lab. UR Team (The Research Center for Advanced Science and Technology, The University of Tokyo, Japan)
Shin-ichiro Kumagaya (The Research Center for Advanced Science and Technology, The University of Tokyo, Japan)

要約
一般に、他者への思いやりは援助行動に結びつく可能性が高いと考えられており、社会的に望ましいとされる。援助行動は被援助者の利益のために行なわれるが、援助者自身にも影響する。援助を行なう場合、実体のない報酬として自尊心の高揚などが生じることが知られているが、これは被援助者の評価とは独立した援助者自身へのポジティブな影響と言える。援助行動が思いやりに基づいて行なわれた場合、行動の内容にかかわらず援助者によってポジティブに解釈され、援助者自身にもポジティブな影響をもたらす可能性がある。そこで本研究では、思いやりの有無が被援助者の主観的な援助行動への評価と自己概念に影響するか検討した。研究において思いやりの有無を操作するには、タスクは同じでも、より思いやりを喚起するような条件が必要である。そこで、思いやりを喚起するタスクを考案し、予備調査でその妥当性を確認した上で2つの研究を実施した。分析の結果、研究1および研究2において仮説は支持されなかった。しかし、過去にボランティア経験がある者はない者に比べて主観的ウェルビーイング、援助意図、状態自尊心などが高いことが示された。これらの結果は、ボランティア経験の有無という要因がなんらかの影響を及ぼす可能性を示唆する。本研究は、個人差特性として測定されることがほとんどであった思いやりを操作した点だけでなく、複数の点で理論的・実践的に貢献すると考えられる。

Abstract
Helping behavior is intended to increase other people's well-being without expecting substantive rewards. Although a helper performs helping behavior for the target's benefit, the behavior also affects the helper. For instance, not only compassionate feelings, but also conformity and norms can produce helping behavior. However, people tend to over-estimate the value of helping behavior when the behavior stems from compassionate feelings. This study aimed to investigate the effects of helping behavior that compassionate feelings elicit on the helper's inner state. In Studies 1 and 2, participants worked as a paid volunteer transcriber for people with hearing difficulties and for other people with difficulties in listening to spoken language (compassion condition) or as an out-sourcing paid job worker (neutral condition). Questions about self-esteem, psychological well-being, intention to help, one's own morality, work efficacy, and the respondent's demographic were asked after the task (dependent variables). In testing the original hypothesis, results from a series of t-tests were not significant. An ANOVA, an exploratory analysis, showed that participants in the compassion condition had a higher level of some dependent variables when they had past volunteer experience in comparison to those who had no experience. Although the original hypothesis was not supported, this study found that the experience of volunteering is important for feeling compassion and the consequential actual helping behavior. Among the findings of this study, notably manipulating compassion experimentally (not as individual difference) is an important contribution to future research.

キーワード
思いやり，援助行動，向社会的行動，ボランティア，文化

1. 序論
苦境にある他者を助けるための行動は多岐にわたる。例えば、個人的にボランティア活動に参加することから、青年海外協力隊などの組織に所属し活動すること、法制度を整えバリアフリーの建築物に予算を充てることなど、様々なレベルで援助をすることができる。援助行動とは、実体のある報酬を期待せずに、他者の利益やウェルビーイングの向上を意図して行なわれる行動である（Nadler, 2020）。援助行動は幅広く、相手に直接関わる行動に限らず、寄付なども含まれる。

援助行動を促進させる要因として、日常的には、被援助者への「思いやり」が挙げられやすい（e.g., JR西日本, 2014）。他者に対して思いやりを持つことは社会的に望ましいとされ、例えば文部科学省は、小学校学習指導要領において「相手のこと

を思いやり、進んで親切にする」という内容を道徳教育の目標として挙げている（文部科学省，2017）。心理学研究において、思いやりは、共感（的配慮）、慈悲、同情などの類似概念として考えられるが、先行研究ではそれらの概念に関して一貫した区別と定義は得られていない（Batson, 2009; Bloom, 2016／高橋訳，2018; 中尾，2015; 新谷，2020; 内田・北山，2001; 山本・樋口，2020）。思いやりは従来の研究では「同情」と訳され、共感の一種として扱われることがほとんどであるが、内田・北山（2001）では、思いやりに含まれる心理傾向として、「他者の気持ちを察し、その人の立場に立って考える」こと、そのうえで「その気持ちや状態に共感もしくは同情する」こと、そして「向社会的行動の動機づけとなる」ことの3点を挙げている。苦境に立っている他者に共感・同情した場合、その苦痛を和らげるための向社会的行動（i.e., 援助行動）を起こしやすくなると考えられる。思いやりは、他者への共感や同情を伴う援助行動の準備状態だと言えよう。そこで本研究では思いやりを、「他者の苦しみを感情的・認知的に理解し、その他者に対する援助行動が準備づけられている状態」と定義した。

しかし、苦しんでいるどんな他者にも思いやりを感じるかというと、そうではないことが明らかになっている。共感や同情を覚える対象の範囲は、対象の特性や状況要因などにより変動する。例えば、利己的な人物には共感が生じにくい。先行研究で示されているような、互恵関係を構築できるような助ける価値のある相手に対して共感が生じやすいことは、進化的観点から考えても整合性がある（山本・樋口，2020；レビューとしてGoetz et al., 2010）。また、共感は、特定の個人に注意を向けるため、狭い範囲のみを対象とするというスポットライト的な性質があることもわかっている（Small and Loewenstein, 2003）。さらに、状況要因については、統制可能性の影響について多く論じられる。これについては蓄積された知見が存在するが、基本的には、自分の力では変えられない困難な状況にいる他者は、そうでない者よりも思いやりの対象とされやすい。自分の努力ではどうにもならない苦境の一例として、障害（特に身体障害）がある。古典的研究と言えるWeiner et al.（1982）においては、日常生活においてもっとも同情を喚起する場面は身体障害者を目にした時だと参加者が報告している。このように思いやりは、援助行動を促進する要因のひとつであるが、喚起される対象は限定的である（Batson et al., 1995; Tee and Shah, 2023）。

思いやりの効果は限定的であるにも関わらず、なぜ、援助行動を行なう際に思いやりを持つことが強調されるのだろうか。その理由として、思いやりを持って援助行動を行なうことが、被援助者に対してだけでなく、援助者に対してもポジティブな効果を生じさせることが考えられる。援助を行なう際には、実体のない報酬として、援助者の自尊心の高揚などが生じることが知られており、これは援助成果と呼ばれる（妹尾・高木，2003）。この援助成果が、援助を行なうことそれ自体によって生じるのではなく、思いやりを持って援助することで生じているという可能性である。思いやりを伴う援助が行為者にポジティブな影響を及ぼすと考えられる理由として、行為の結果の解釈には意図が影響することが挙げられる。例えばGray（2012）は、同じ刺激であっても、善意によって提供されたものである場合にはより快いものに感じられることを明らかにした。この研究では、善意の伴ったマッサージはより心地よく感じられ（Study 2）、キャンディはよりおいしいと判断される（Study 3）ことが示された。これは行為者の意図が行為の受け手に対する影響を示しているが、行為者が自身の行なった行為を解釈する際にも同様の影響を与えるのではないかと考えられる。思いやりも善意の一種と考えるのであれば、思いやりを持って援助行動を行なったときの方が、援助者自身へのポジティブな効果が生じている可能性がある。このように、思いやりを持ってなされた行為に関して、行為者（援助者）がより効果的だと解釈し、行為者自身にポジティブに影響する。それゆえに、援助者自身に対しても、また上述の通り社会の風潮という意味でも、思いやりが強調され、それを持たない行為は、たとえ同一の行為だとしても軽視されると考えられる。

このように、援助行動を行なうことは援助者に対してもポジティブな影響を与える可能性があるが、先行研究ではこの効果が援助行動を行なうことそれ自体による効果なのか、援助行動に伴う別の要因によるものなのかは確かめられてこなかった。そこで、援助行動による援助者自身へのポジティブな効果が、援助それ自体でなく援助時に思いやりを感じていることに起因する可能性を検討する。

以上から、本研究では、援助時に感じる思いやりの有無によって、援助者の自己概念や、自身の援助行動に対する評価に影響があるかを確かめることを目的とした。思いやりを持って援助行動を行なった場合、そうではない場合に比べて自尊心の高揚が生じたり、自身の援助行動の効果をより高く感じたりすると仮説を立てた。

2. 予備調査

研究において思いやりの有無を操作するには、援助行動自体は同じでも、より思いやりを喚起するような条件が必要である。そこで予備調査では、思いやりを喚起する実験手続きを考案し、その妥当性を調べた。

2.1 実験参加者

2023年3月25日に、クラウドソーシングサービス上で実験参加者を募集した。著者によって作成された調査ページがワーカー募集ページに掲載され、関心を持った回答者が調査ページに進んだ。本研究の手続きには、研究の真の目的を説明するデブリーフィングが含まれるため、データ提供に関するインフォームドコンセントは調査の最後に行ない、それを踏まえてデータを提供することに同意しなかった2名の参加者の回答を除外した。また、実験の目的に気づいていたと回答した4名、回答に不備があった2名も除外した。最終的に144名（女性69名、男性75名、平均年齢41.50、標準偏差10.31）のデータを分析対象とした。調査の実施にあたって、著者の所属する大学で倫理審査を担当する委員会より承認を得た。

2.2 実験操作と手続き

研究目的を隠すため、実験参加者には「音声の文字起こしに関する仕事」として実験への参加を依頼した。文字起こし作業

中に思いやりを持つ程度を操作するために、2種類の表紙ページが使用された。思いやり条件では、「文字起こし有償ボランティアの募集」とタイトルがつけられ、仕事概要として「当プロジェクトでは、日本語音声の聞き取りに困難がある学生に学びの機会を提供するため、録画された講義映像に字幕をつけ、学生がいつでも視聴できるように提供するサポートをしています。」「様々な困難を抱える学生が、安心して大学で学べるように、あなたの力を貸していただけませんか。」と書かれていた。統制条件では、「文字起こしアルバイトの募集」というタイトルで、仕事概要は「講義映像に字幕をつけるため、音声を文字に起こしてデータ化するお仕事です。」と書かれていた。どちらの条件でも、作業の概要の説明（音声が1分程度であることや、謝礼の金額、作成された文字データがろう・難聴の学生や、日本語が得意でない留学生、発達障害などで聞き取りに困難がある学生に学びの機会を保障するために用いられることなど）や、作業時の注意点（音声の内容を外部に漏らさないようにすること、謝礼の支払い方法は最後のページに説明があることなど）は同じ内容が記載されていた。参加者には、これらの表紙ページのうちどちらか一方が表示された。

表紙ページにて参加に同意した参加者は、続いて文字起こし作業を行なった。1分程度の音声ファイルを再生しながら、その内容を文字データに変換する作業を行なった。その後、参加者は続く質問に回答した。すべての手続きが終了したのち、デブリーフィングを行なった。この仕事が心理学実験であったことや実験の目的、データの使用用途を説明した上で、改めてデータ提供に対する同意と、研究目的に気づいていたかを確認した。最後に、報酬の支払いのためにクラウドソーシングサービスアカウントに関する情報を記入してもらった。この情報は報酬の支払いのためのみに使われ、データと紐づけられることがないことが説明された。

2.3 測定項目

文字起こし作業後のアンケートとして、以下の項目を訊ねた。なお、本当の研究目的に気づかれないよう、このアンケートは今後の仕事募集の参考にするために使われると説明され、この偽の目的が疑われないようにするための、分析には用いない無関係な項目（フィラー項目）も含まれていた。また、回答内容によって謝礼が変わることはないことが明記されていた。

2.3.1 負担感

作業の負担感を測る質問として、「今回の作業にかかった負担はどのくらいでしたか。」という質問に、1. 非常に負担が小さかった〜 5. 非常に負担が重かった、の5件法で回答を求めた。この項目はフィラー項目であった。

2.3.2 感情

作業中に感じていた感情について訊ねた。「今回の作業について、全体的にみて、以下の各項目の内容をどのくらい感じていましたか」という教示文で、退屈、心配、面白さ、思いやり、共感、同情、楽しさ、いらだちの8項目について5件法で回答を求めた（1. まったく感じなかった 〜 5. 非常に感じた）。このうち、思いやり、共感、同情の3項目が思いやりを測定するための項目であり、他の項目はフィラー項目であった。

2.3.3 思考

作業中に考えていた内容について訊ねた。「今回の作業について、全体的にみて、以下の各項目の内容をどのくらい考えていましたか」と教示した上で、作業の報酬について、作業にかかる時間について、作業の出来について、音声の内容について、字幕を必要とする学生について（以後、学生）、音声の聞き取りが難しい学生が抱える生きづらさについて（以後、生きづらさ）の6項目をどのくらい考えていたか、1. まったく考えなかった 〜 5. 非常に考えた、の5件法で回答を求めた。このうち、作業中の思いやりを測定する項目は「学生」と「生きづらさ」の2項目であった。

2.3.4 思いやりその他項目

上記の感情・思考以外で他者の苦しみの感情的・認知的な主観的理解を測るため、「どのくらい心を込めて文字起こしデータを作成しましたか」「どのくらい、この音声が届く学生のためを思って行ないましたか」「どのくらい思いやりをもってこの作業を行ないましたか」の3項目への回答を求めた。それぞれ5件法で訊ねた。

2.3.5 デモグラフィック変数

アンケートの最後に、参加者に関する情報として性別と年齢を訊ねた。また、過去に文字起こしを行なった経験、ボランティアに参加した経験の有無を訊ねた。

2.4 結果と考察

感情から思いやり、共感、同情の3項目（以後、思いやり感情）、思考から学生と生きづらさの2項目（以後、思いやり思考）、思いやりの3項目（以後、思いやりその他）の信頼性係数はそれぞれα = 0.75, 0.86, 0.82であり十分に高いと考えられるので、平均値を算出し合成変数とした。条件（思いやり vs. 統制）を独立変数、思いやり感情・思いやり思考・思いやりその他をそれぞれ従属変数としてWelchのt検定を行った結果、表1のようになった。t検定の結果、すべての従属変数について、統制条件よりも思いやり条件のほうが有意に高い平均値が確認された。この実験手法を用いることによって、援助行動における思いやりの程度を操作することが可能であることが示された。

3. 研究 1

研究1の目的は、予備調査で妥当性を確認した実験手続きにより操作された思いやりの有無で、援助者の自己概念が変化するか検討することであった。具体的には、思いやりを喚起するタスクを行なうと（思いやり条件）、統制条件に比べ、援助意図が高まり、援助者の自己概念に影響するという仮説の検討を行なった。自己概念とは、自己の認識に関する概念の総称である（小野寺, 2003）。自己概念の中核として、自己認識と、認識された自己に対する評価（i.e., 自尊心）があるとされ、そのような自己に関する側面がどのように援助行動により影響されるかを検討するため自己概念を取り上げた。思いやりの操作が影響すると考えられる自己概念として、研究

表1：予備調査における*t*検定の結果

	思いやり条件（*n* = 68）		統制条件（*n* = 76）		*t*値	*p*値	*d*
	M	*SD*	*M*	*SD*			
思いやり感情	2.96	0.76	2.59	0.74	2.95	.004 **	0.49
思いやり思考	3.46	0.93	2.82	1.16	3.58	.000 ***	0.60
思いやりその他	3.92	0.75	3.47	0.90	3.24	.001 **	0.54

注：*** $p < .001$, ** $p < .01$。

1では先行研究を参考にして主観的ウェルビーイング、自尊心を測定した（Epley, et al., 2023; 新谷, 2020）。参加者に研究の真の目的を悟られないよう、タスクに関する事後アンケートという位置づけで、極力時間をかけないように調査を行なった。また、事後アンケートという文脈で不自然に思われないように、参考にした尺度のワーディングなどを一部変更した。

3.1 サンプルサイズ設計

G*power（Faul et al., 2007）によりサンプルサイズ設計を行なったところ、210名と算出された（$d = 0.50$, $\alpha = 0.05$）。そこで、210名のデータ取得を目標に、除外データを見込んで350名の参加者を募集した。

3.2 実験参加者

2023年5月27日に、クラウドソーシングサービス上で実験参加者を募集した。著者によって作成された調査ページがワーカー募集ページに掲載され、関心を持った回答者が調査ページに進んだ。調査の最後に行なったデブリーフィングでデータを提供することに同意しなかった1名の参加者の回答を分析から除外した。また、実験の目的に気づいていたと回答した17名、回答に不備があった4名、以前類似の調査に参加したことがあると答えた12名も除外した。最終的に319名（女性189名、男性128名、不明2名；平均年齢43.07、標準偏差9.81）のデータを分析対象とした。調査の実施にあたって、著者の所属する大学で倫理審査を担当する委員会より承認を得た。調査実施に先立って、研究目的や仮説、分析計画を明示し登録しておく事前登録を行なった（https://aspredicted.org/P8V_HSB）。

3.3 実験操作と手続き

予備調査と同様の操作と手続きであった。

3.4 測定項目

文字起こし作業後のアンケートとして、以下の項目を訊ねた。なお、本当の研究目的に気づかれないよう、このアンケートは今後の仕事募集の参考にするために使われると説明され、この偽の目的が疑われないようにするためのフィラー項目も含まれていた。また、回答内容によって謝礼が変わることはないことが明記されていた。操作の妥当性確認のため、一部の項目は予備調査と同様のものであった。

3.4.1 感情

予備調査で用いた8項目のうち、5項目について5件法で回答を求めた。このうち、思いやり、共感の2項目が思いやりを測定するための項目であり、他の項目はフィラーとして配置された。

3.4.2 思考

予備調査で用いた6項目のうち、5項目について5件法で回答を求めた。このうち、作業中の思いやりを測定する項目は「学生」の1項目であり、他の項目はフィラーとして配置された。

3.4.3 思いやりその他

予備調査で用いた3項目のうち、「どのくらい、この音声が届く学生のためを思って行ないましたか。」「どのくらい思いやりをもってこの作業を行ないましたか。」の2項目について5件法で回答を求めた。

3.4.4 援助意図

研究1における従属変数として、「次にこのような文字起こし作業の機会があれば、参加したいと思いますか。」「他の困難を抱えている人の支援になる活動があれば、参加したいと思いますか。」の2項目を援助意図として測定した。それぞれ5件法で訊ねており、得点が高いほど援助意図が高いことを意味していた。「次にこのような文字起こし作業の機会があれば、参加したいと思いますか。」は、いつ参加するかという時間軸を限定せずに援助意図を測定するために用いた。

3.4.5 主観的ウェルビーイング

従属変数として、主観的な内的状態について訊ねた。「以下の各項目は、どのくらいあなた自身に当てはまると思いますか。」という教示のもと、「幸福である」について5件法で回答を求めた。

3.4.6 自尊心

従属変数として、自尊心について訊ねた。作業後のアンケートとして回答を求めたため、既存の尺度をそのまま用いると不自然になると考え、妹尾・高木（2004）の項目を参考に、ワーディングや項目数を変更し使用した。「以下の各項目は、どのくらいあなた自身に当てはまると思いますか。」という教示のもと、「役に立つ人間である」「物事をうまくやれる」「人並みには価値がある」「だめな人間である（逆転項目）」の4項目に5件法で回答を求めた。研究目的を悟られないため、「効率重視である」「こだわりが強い方である」の2項目をフィラーとして含めた。

3.4.7 デモグラフィック変数

アンケートの最後に、参加者に関する情報として性別と年齢を訊ねた。また、過去に文字起こしを行なった経験、およ

びボランティアに参加した経験の有無を訊ねた。

3.5 結果

感情の2項目（以後、思いやり感情）、思いやりその他の2項目の信頼性係数はそれぞれ α = 0.73, 0.83 であり十分に高いと考えられるので、平均値を算出し合成変数とした。援助意図（2項目）と自尊心（4項目）についても、信頼性係数がそれぞれ α = 0.81, 0.90 であったので、同様に合成変数とした。

条件（思いやり vs. 統制）を独立変数としてWelchの t 検定を行った結果、表2のようになった。予備調査でも用いた思いやり感情、思いやり思考、思いやりその他変数については、予備調査と同様の結果であった。それ以外の従属変数については、いずれも有意な差は確認されなかった。

仮説に関連する t 検定以外で探索的に実施すると事前登録に明記していた、条件（思いやり vs.統制）とボランティア経験の有無を独立変数とした分散分析を行なったところ、従属変数が主観的ウェルビーイングの場合、ボランティア経験の主効果のみが確認された（F (1, 315) = 14.61, p < .001）。過去にボランティア経験がある者は主観的ウェルビーイングが高かった（2.96 vs. 3.41）。従属変数が援助意図の場合も同様で、ボランティア経験の主効果のみが確認され（F (1, 315) = 18.73, p < .001）、過去にボランティア経験がある者は援助意図が高いことが示された（4.14 vs. 4.46）。従属変数が自尊心の場合、ボランティア経験の主効果（F (1, 315) = 23.94, p < .001）と、ボランティア経験と条件の交互作用が見られた（F (1, 315) = 5.70, p = .018）。過去にボランティア経験がある者は自尊心が高かった（3.45 vs. 2.99）。また、ボランティア経験がある者は思いやり条件において（vs.統制条件）自尊心が高かった（2.88 vs. 3.56）。

3.6 考察

研究1においては、予備調査にて考案された思いやり喚起操作の妥当性を確認するとともに、その実験手続きを用いて、思いやりが援助者の自己概念に与える影響を検討した。その結果、タスクによる思いやり喚起については予備実験と同様に効果が確認されたが、援助者の自己概念への影響に関する仮説は支持されなかった。しかし、探索的な分析の結果により、過去のボランティア経験の有無が何らかの役割を果たしているという示唆的なエビデンスが得られた。これは当初の仮説設定としては想定外であった。ボランティア経験については、山本（2018）や妹尾（2008）が、ボランティア活動から得られた心理的報酬である援助成果が後続のボランティア活動に影響すると報告している。したがって、仮説とは直接関係はないが、示唆のある知見を提供する可能性があるため、研究2においても研究1と同様の探索的検討を行なうこととした。

仮説が支持されなかった理由として、測定された変数に問題があった可能性がある。例えば、自尊心である。自尊心は、時間や状況によらず安定して保たれる特性自尊心と、状況によって変化する一時的状態である状態自尊心とで区別される（阿部・今野，2007）。研究1では、個人差特性としての安定した特性自尊心を尋ねていたと考えられる。本研究の仮説にあるような、操作された思いやりによる自尊心への影響を明らかにするためには、タスクを行なった直後の状態に注目するような状態自尊心の方が適切であったかもしれない。ウェルビーイングについても自尊心と同様に、思いやりを操作するための実験手続きによって変動しうるウェルビーイングというよりは、より広範で持続性のある自己の状態を尋ねていた。このような問題点もあるため、より実験操作による効果が明らかになるように、測定尺度を変更し研究2を行なった。さらに、より精緻に思いやりの効果を調べるために、研究2では作業効力感と道徳性を新たな従属変数として追加した。これは、自分の行為が被援助者の役に立ったという認知と、道徳的行為としての援助行為という認知に注目したためである。思いやりを持って行動した方がその援助行動の効果を高く見積もると予想された。また、思いやりを持つこと自体が他者志向であるので、それに導かれて取った行動は道徳性が高いととらえ、その行動をした自分自身の道徳性を高く評価することが予想された。

4. 研究 2

研究2においては、予備調査にて考案された思いやり喚起タスクの実験操作を用いて、思いやりが援助者の自己概念と自身の援助行動の評価に与える影響を検討した。研究1では、自尊心を特性的に尋ねるとともに、参加者の生活における全般的な主観的ウェルビーイングを測定した可能性が払拭できない。これでは思いやりの操作による効果を測定できていなかったという問題点があったため、研究2では、より明確な教示で状態自尊心および主観的ウェルビーイングを測定するとともに、自己概念についてさらに異なる側面を測定するため、新たな項目も追加した。具体的には、作業効力感と自己の道徳性であった（cf. 中尾，2015; Niiya et al., 2022; 山本，2018）。自己の道徳性は、同情や共感との関係が議論されているため（中

表2：研究1における t 検定の結果

	思いやり条件（n = 153）		統制条件（n = 166）		t 値	p 値	d
	M	SD	M	SD			
思いやり感情	3.37	0.85	3.17	0.79	–2.18	.030 *	–0.24
思いやり思考	3.67	1.03	3.28	1.16	–3.15	.002 **	–0.35
思いやりその他	3.88	0.97	3.53	1.00	–3.14	.002 **	–0.35
援助意図	4.34	0.67	4.27	0.68	–0.99	0.32	–0.11
well-being	3.22	1.09	3.14	1.05	–0.55	0.55	–0.07
自尊心	3.21	0.89	3.23	0.84	0.22	0.83	0.03

注：* p < .05, ** p < .01。

尾, 2015)、自己概念における自己評価の一環として測定した。また、研究1ではボランティア経験の有無が影響している可能性が示されたので、ボランティア経験についての項目をより具体的にし、研究1と同様の分析を行なうことにした。

4.1 実験参加者

研究1と同様のクラウドソーシングサービス上で実験参加者を募集した。2023年9月23日にデータ収集を行なった。参加者のうち、予備調査および研究1に参加したことがあると答えた13名、データ提供に同意しなかった28名、実験の目的に気づいていたと回答した24名、回答に不備があった1名を除外し、最終的に286名(女性157名、男性128名、不明1名、平均年齢40.46歳、標準偏差11.09)のデータを分析対象とした。調査の実施にあたって、著者の所属する大学で倫理審査を担当する委員会より承認を得た。調査実施に先立って、事前登録を行なった(https://aspredicted.org/RSJ_Y5V)。

4.2 実験操作と手続き

研究1と同様の操作と手続きであった。

4.3 測定項目

研究1と同様に、文字起こし作業後のアンケートとして以下の項目を訊ねた。項目の呈示順序は以下と同様であった。操作チェックのための思いやり項目は、参加者の負担削減と時間短縮のため、研究1よりも数を減らした。

4.3.1 思いやり

研究1と同様の項目を用い、作業中に感じていた思いやりの程度を測定した。具体的には、作業中に感じていた感情(「思いやり」「共感」の2項目と、フィラー4項目)、作業中に感じていた内容(「字幕を必要とする学生について」を「思いやり思考」として1項目と、フィラー4項目)、その他の思いやり項目として「どのくらい、この音声が届く学生のためを思って行ないましたか。」「どのくらい思いやりをもってこの作業を行ないましたか。」の2項目への回答を求めた。すべて5件法で回答を求めた。

4.3.2 援助意図

研究1と同様、「次にこのような文字起こし作業の機会があれば、参加したいと思いますか。」「困難を抱えている人の支援になる活動が他にあれば、参加したいと思いますか。」の2項目(5件法)で援助意図を測定した。

4.3.3 作業効力感

参加者が行なった文字起こし作業の有効性について、参加者自身がどう評価しているかを測定した。「今回の作業を終えて、いま、以下の各項目の内容についてどのくらい同意しますか。」という教示文の後、作業効力感として「今回の作業で、自分は字幕を必要とする学生の役に立てた」「今回の作業は、字幕を必要とする学生にいい影響を与えるだろう」「今回の作業によって、字幕を必要とする学生は助かるだろう」の3項目と、フィラーの「自分は、今回のような作業が得意だ」の1項目に対して、「1. まったくそう思わない」から「5. 非常にそう思う」の5件法で回答を求めた。なお、作業による効果を測定するため、教示文の「いま」の部分は赤字かつ太字で呈示した。

4.3.4 状態自尊心および主観的ウェルビーイング

作業を行なったことによる状態自尊心および主観的ウェルビーイングについて測定した。状態自尊心尺度(阿部・今野, 2007)を参考に、「今回の作業を終えて、いま、以下の各項目の内容についてどのくらい感じますか。」と教示し、各項目を提示した。作業効力感と同様、教示文の「いま」の部分は赤字かつ太字で呈示された。状態自尊心は、状態自尊心尺度のうち「いま、自分は人並みに価値のある人間であると感じる。」「いま、自分はだめな人間であると感じる。(逆転項目)」「いま、自分には色々な良い素質があると感じる。」「いま、自分に対して肯定的であると感じる。」の4項目を用いた。主観的ウェルビーイングは「いま、自分は幸福であると感じる。」と「いま、自分は恵まれていないと感じる。(逆転項目)」の2項目によって測定された。すべての項目に対し、「1. まったくそう思わない」から「5. 非常にそう思う」の5件法で回答を求めた。

4.3.5 自己の道徳性

自己概念が影響されたかを調べるため、作業後に自己の道徳性について測定した。「今回の作業を終えて、いま、自分に対してどのように思いますか。以下の各項目について、自分にどのくらい当てはまると思うかをお答えください。(「いま」の部分は赤字かつ太字で呈示)」と教示したのち、「優しい」「善良」「冷たい(逆転項目)」「几帳面」「合理的」「効率重視」の6項目について、自分に当てはまる程度を5件法(「1. まったく当てはまらない」～「5. 非常に当てはまる」)で回答を求めた。このうち「優しい」「善良」「冷たい」の3項目が道徳性を測定する項目であり、残りはフィラー項目であった。

4.3.6 デモグラフィック変数

アンケートの最後に、参加者に関する情報として性別と年齢を訊ねた。また、過去に文字起こしを行なった経験、およびボランティアに参加した経験の有無を訊ねた。ボランティアに参加した経験については、研究1においては「あなたはこれまで、何かのボランティアに参加した経験がありますか」という項目であった。しかしこのような訊き方をすると時期の幅がかなり広くなると想定されたため、範囲を絞り、研究2では「過去一年間で、何かのボランティアに参加した経験がありますか」という尋ね方をした。

4.4 結果

感情から思いやり、共感の2項目(以後、思いやり感情)、思いやりその他の2項目の信頼性係数はそれぞれ $\alpha = 0.73, 0.85$ であり十分に高いと考えられるので、平均値を算出し合成変数とした。その他の従属変数においては、援助意図、作業効力感、状態自尊心、主観的ウェルビーイング、自己の道徳性の信頼性係数は $\alpha = 0.66, 0.82, 0.88, 0.49, 0.74$ であった。援助意図については信頼性係数がやや小さいが2項目とも採用し合成変数としたが、主観的ウェルビーイングについては著しく信頼性係数が小さいので、逆転項目は外し1項目のみ

で分析に使用した。条件（思いやり vs.統制）を独立変数、思いやり感情・思いやり思考・思いやりその他をそれぞれ従属変数としてWelchの*t*検定を行った結果、表3のようになった。

思いやり感情、思いやり思考、思いやりその他の変数については、予備調査および研究1と同様の結果であった（ただし、思いやり思考については有意傾向）。それ以外の従属変数については、研究1と同様にいずれも有意な差は確認されなかった。

研究1と同様に、仮説に関連する*t*検定以外で、条件（思いやり vs.統制）とボランティア経験の有無を独立変数とした分散分析を行なった。従属変数を状態自尊心、主観的ウェルビーイング、援助意図、自己の道徳性とした場合のボランティア経験の主効果のみが統計的に有意であった（それぞれF (1, 282) = 17.16, F (1, 282) = 7.29, F (282) = 17.16, F (1, 282) = 7.44, F (1, 282) = 13.10, $p < .05$）。作業効力感を従属変数とした場合は、主効果および交互作用は非有意であった。

4.5 考察

研究2においては、予備調査にて考案された思いやり喚起タスクの実験操作を用いて、研究1の追試および変数を追加して仮説を検討した。さらに、研究1と同様に、過去のボランティア経験の影響も考慮に入れ分析した。その結果、実験操作による思いやり喚起については予備実験および研究1と同様に確認されたが、援助者の自己概念と自身の援助行動の評価への影響に関する仮説は支持されなかった。しかし、ボランティア経験がある者は、ない者に比べて作業効力感以外の従属変数が高いことが示された。これは、研究1と一貫した結果である。したがって、ボランティア経験の有無が援助行為（i.e., 本研究で用いた実験課題）によって生じた内的な状態や自己評価に影響する可能性があると考えられる。

5. 総合考察

本研究では、援助行動にともなう思いやりが援助者の自己概念や自己の行動の評価に変化を及ぼすか検討した。具体的には、予備調査で考案された思いやりを喚起する実験操作を使用し、思いやりを喚起された者はそうでない者に比べて、自尊心、主観的ウェルビーイング、援助意図、作業効力感、そして自己の道徳性が高くなると予測した。分析の結果、研究1と研究2いずれにおいても思いやり喚起には成功したが、仮説は支持されなかった。しかし、過去にボランティア経験がある者はない者に比べて①主観的ウェルビーイングと援助意図が高いこと（研究1および研究2）、②状態自尊心、援助意図、自己の道徳性が高いこと（研究2）が示された。また、過去にボランティア経験がある者ほど特性自尊心が高く、ボランティア経験がある者は思いやり条件において（vs.統制条件）特性自尊心が高いことも確認された（研究1）。これらの結果は、ボランティア経験の有無という要因が従属変数に影響を及ぼす可能性を示唆する。

はじめに、仮説が支持されなかった点について考察する。第一に、実験操作の効果量がやや小さいと言える（$d = |0.01| - |0.35|$）。また、検出力にもかなり幅があり、全体的に高いとは言えない（$1 - \beta = 0.05 - 0.88$）。今後このタスクを用いるときは、本研究で得られた効果量や検出力を参考にサンプルサイズ設計などの実験計画を行なうのも一案であろう。第二に、実験操作には効果が見られなかったが、参加者が感じた思いやりの程度には効果がある可能性がある。すなわち、条件に関わらず、ある個人が自身の行為中に思いやりをどのくらい感じていたかが、自己概念や援助行動への評価に影響を与える可能性がある。これは、思いやりの感じやすさ、すなわち思いやりの個人差特性の効果と言えるだろう。測定法や定義は一貫しないものの、ほとんどの先行研究で想定されてきた変数である（Miyagawa et al., 2022; 内田・北山, 2001）。本研究のような、実験的に操作された思いやりと個人差特性は区別して考える必要があるかもしれない。本研究における操作とは関係なく、個人個人における思いやりの感じやすさが従属変数に影響したため違いが見られなかったということも考えられる。さらに、思いやりの個人差特性に注目した場合、本研究で想定した因果関係が逆だったとも考えられる。例えば、自尊心が高いと思いやりの感じやすさも高くなる、という関係である。個人差特性と操作され変動する思いやりを区別し、本研究よりもさらに踏み込んだモデル構築が今後の研究においての一つの方向性となるだろう。第三に、参加者募集の際の手続きであるが、本研究においては、募集の文言はまったく同一で、その募集を見て調査ページを開いたときにはじめて実験操作の表紙ページが表示される仕様となっていた。しかしながら、表紙の記載内容（有償ボランティアと単なるアルバイト）によってもともと異なる特性を持つ参加者が

表3：研究2における*t*検定の結果

	思いやり条件（$n = 145$）		統制条件（$n = 141$）		*t*値	*p*値	*d*
	M	*SD*	*M*	*SD*			
思いやり感情	3.38	0.89	3.16	0.74	−2.31	.020 *	−0.27
思いやり思考	3.69	0.98	3.47	1.24	−1.67	.096 †	−0.20
思いやりその他	3.85	0.89	3.54	1.10	−2.61	.010 *	−0.31
援助意図平均	4.35	0.61	4.28	0.64	−0.97	0.33	−0.12
相手への影響	3.96	0.62	4.02	0.69	0.69	0.49	.08
状態自尊心	3.45	0.83	3.47	0.89	0.20	0.85	.02
well-being	3.41	0.98	3.40	1.03	−0.08	0.94	−0.01
道徳性	3.54	0.69	3.51	0.70	−0.36	0.72	−0.04

注：* $p < .05$, ** † $< .10$。

調査を続行した可能性がある。例えば、援助行動への関心が高い人とそうでない人などである。この点については、今後の課題となろう。第四に、本研究で用いた枠組みとは異なる未知の文脈で生じた思いやりの方が効果を持っていた可能性もある。すなわち、「この操作で喚起される思いやり」では効果がなかった可能性である。思いやりに相手の気持ちの直感的理解（察し）などの異なる側面が内在していることは、例えば内田・北山（2001）が提唱している。自己概念に影響する思いやりの側面は本研究で想定したものとは異なるかもしれない。第五に、本研究で想定したもの以外の未知の変数が影響した可能性がある。例えば、社会的支配傾向（木田他，2023）や、利益とコストの認知（一言他，2008）、援助のタイミング（Koo et al., 2023）、罪悪感などその他の感情（Lim and DeSteno, 2023）、被援助者に対する能力認知（小川，2022）、文化（Niiya et al., 2022）などである。第六に、実験で用いた課題の特性が影響したことも考えられる。困っている他者に対する周りの人々からの援助がソーシャルサポートと呼ばれるが、これは道具的サポートと情緒的サポートというカテゴリで区別されることが知られる（浦，1992）。道具的サポートとは問題解決のための情報や実体性のあるものを提供する援助であり、情緒的サポートとは被援助者の情緒に働きかける援助である。本研究で実験課題として用いた援助行動は、道具的サポートに当てはまるだろう。これは上記の第四の点とも関連するが、今後は情緒的サポートに該当するような思いやり喚起タスクを用いてその影響を検討することで、タスクによって喚起される思いやりの性質が異なることを示せるかもしれない。

次に、ボランティア経験について考察を述べる。仮説では予測されていなかったが、ボランティア経験については一部の従属変数に影響を与える可能性があるという結果が得られた。本研究におけるタスクではなく過去のボランティア経験によるなんらかの心理的報酬（i.e., 援助成果）が継続することで思いやりなどの他者志向の感情に敏感に反応するといった可能性が無視できないため、ボランティア経験について考察することは、今後、思いやりに関する研究を行なう際にひとつの方向性を示すだろう。ボランティア活動については多くの研究が行なわれているものの、明確に定義されていない場合が多い（藤原他，2005）。数少ない定義のうち、文部科学省（2022）は社会生活基本調査の中で、ボランティア活動を「仕事、学業とは別に地域や社会のために時間や労力、知識、技能などを提供する活動」とし、例を挙げている。定義は一貫しないものの、ボランティア経験が、ボランティアする側の自己概念や感情において重要な要因となることは、いくつかの先行研究においても示されている（北山他，2009；妹尾・高木，2004）。本研究のほとんどの従属変数に対してボランティア経験の主効果が確認されたことは、これらの先行研究と整合していると言える。自尊心に関しては、研究1では交互作用が見られたものの研究2では交互作用は見られなかった。研究1では特性自尊心を、研究2では状態自尊心を測定していたが、事後アンケートという形を取ったので、特性自尊心も実験操作に影響された可能性は払拭できない。研究2では「いま」と強調して教示したが、項目自体は研究1と重複するものが多かったので、いずれの研究でも、実験操作により変動した自尊心を測定していた可能性がある。そのように考えると、研究1と研究2の結果の違いは、ボランティア経験を尋ねる項目に帰属できるかもしれない。研究1では「今までに」ボランティア経験があるかどうかを尋ねたが、研究2では「過去1年以内」と期間を狭めて尋ねた。人数に偏りが見られたことも踏まえると、ボランティア経験のタイミングも考慮に入れる必要があるかもしれない（研究1では「経験あり」が153人、「経験なし」が166人；研究2では「経験あり」が64人、「経験なし」が222人）。さらに、ボランティア経験はボランティアの時期、期間、種類を制限していないので、どのような形のボランティアであっても、主観的に「過去に人を助けた」という認識により自尊心に影響が出た可能性もある。

研究2において、ボランティア経験が作業効力感に効果がなかったことは特筆すべきであろう。本研究の作業効力感とは、自分のしたことが相手にポジティブな影響を与えるという主観的な認知である。この認知は、「向社会的行動において、他者との相互作用を通じて、援助者自身が認知する心理・社会的な内的報酬」である援助成果を促進し、その後のボランティア活動の継続が動機づけられる（妹尾・高木，2003；山本，2018）。本研究では思いやり喚起タスク自体を有償ボランティアと呈示しているため、仮説検証のための*t*検定においても、過去のボランティア経験を要因とした追加の分散分析においても作業効力感に差が認められなかったのは先行研究の知見とは矛盾する結果である。しかし、すべてのボランティア経験が作業効力感を促進するわけではないとも考えられる。妹尾・高木（2004）では、ボランティア活動（援助行動）それ自体が援助者の内的状態に影響するのではなく、授与した援助の結果（の知覚）が効果をもたらすことが示唆されている。それを踏まえると、実際に自分の行為の反応を確認できること（i.e., 被援助者との相互作用）や、過去に行なったボランティア経験の種類や効果の持続などの要因が影響している可能性がある。例えば、過去にボランティアをした際のポジティブな体験（感謝された、など）をもとに自身の援助行動を評価する（きっと感謝してもらえる、など）ため、援助者自身にポジティブな影響をもたらしたことが考えられる。ボランティア活動においては、個人差要因（信頼など；Ng and Cheung, 2023）の影響も報告されているので、この点に注目するのも今後の研究の方向性となろう。

ボランティア活動についての先行研究の知見を踏まえて本研究の結果を見ると、思いやりの生起の有無がトリガーとなってその後の行為の作業効力感、自己概念、将来の援助意図に影響するとは言えないとわかった。どちらの条件においても同様に、役に立ちたいという願望が促されたのかもしれない（cf. 妹尾・高木，2004）。また、本研究を行なった日本という文化の影響も無視できない（Imada, 2012）。援助行動の文脈においては、日本人は、被援助者の援助要請が明確でない場合に援助意図や行動を抑制することが知られる（橋本他，2023; Niiya et al., 2022）。相手の迷惑になったり傷つけたりするかもしれないという懸念から、あえて行動しないこと自体が思いやりだという指摘もある（満野・三浦，2010）。この懸念は相手の心的状態を正確に読むこと、すなわち「相手の心を察する」ことにより発生するものである。東アジアでの「察する」ことの重要性は、思いやり、共感、同情などの先行研究において示されている（Atkins

et al., 2016; Cassels et al., 2010; Chopik et al., 2017; 唐澤・平林, 2013; 小川, 2014; 内田・北山, 2001)。本研究においては、どちらの条件においても、被援助者と想定される対象の援助要請およびその援助がどのように活用されるのかがカバーストーリーで明確に説明されていた。そのため、援助が必要かどうか察したり効果を推測したりする必要性が低くなり、作業効力感に差が見られなかったとも考えられる。本研究ではボランティア経験が自尊心などの従属変数に直接影響していることが見出されたが、思いやり喚起タスク自体の影響としては、作業効力感が促進されることで後続の従属変数に効果があるというようなモデルだった可能性もある。また、上述したが、思いやりは生じても、自己の行為の効果を実際に確認する機会として被援助者との相互作用や相手からのフィードバックがないと作業効力感は影響されないのかもしれない。察することの重要性などの文化的背景や行為の種類を考慮に入れることで、思いやりという概念がより立体的になるだろう。

5.1 本研究の限界と貢献

本研究には、以下のような限界があった。第一に、質問項目に関する問題である。有償ボランティアもしくはアルバイトというカバーストーリーであったため、「今後の支援依頼の参考にするための事後アンケート」という形で尺度を呈示する必要があった。したがって、不自然に思われないような項目作りを優先せざるを得ず、ワーディングや項目数に制限があった。さらに、最終的にはどちらの条件も報酬が発生していた。第二に、社会的望ましさの問題である。実験条件に関わらず思いやりに関する項目は比較的得点が高かった（5件法で3以上）ことを踏まえると、思いやりを持つことは望ましいことだと多くの参加者たちが考え、実験条件に関わらず、ある程度の思いやりを持ちながら援助行動を実施・その後の質問に回答した可能性も払拭できない。

以上のような限界点があるものの、本研究の知見は思いやりを感じることが援助者の心理的適応を促進する可能性を検討した点で一定の意義がある。例えば、効果的な援助行動を行なう際の方略を模索し教育的介入などに応用できる可能性がある。本研究はダイバーシティ＆インクルージョンの実現や共生社会を目指す中で、利他性、共感、援助行動などの様々な心的プロセスの解明に示唆を与えるものである。

6. 結語

仮説は支持されなかったが、本研究から得られる示唆は多いと考えられる。思いやりは先行研究においては個人差特性としてとらえられ個人内での強度を測定されることがほとんどであるが、本研究では思いやりの喚起を操作できる実験課題を考案した。このような実験操作の考案とともに仮説の実証的検討を試みた本研究の結果から、以下のことが明らかとなった。まず、アルバイトという枠組みよりもボランティアという枠組みで行なった方が、援助行動時に抱く思いやりの気持ちは高まるが、援助行為の効果に対する援助者自身の評価や、自己概念には影響しない。さらに、過去のボランティア経験が、援助行動後の主観的な自己評価に関連する可能性がある。今後は、実験的に喚起された思いやりの機能や、影響する変数の特定とそのような変数が作用し合うメカニズムの解明が待たれる。

謝辞

本研究は、科学研究費補助金（課題番号：JP21H05175: B01）の助成を得て行なわれた。本研究の一部は障害学会第21回大会（2024年，東京）、障害学会第20回大会（2023年，東京）、The Society for Personality and Social Psychology annual convention (2024, San Diego) で発表された。

引用文献

阿部美帆・今野裕明（2007）．状態自尊心尺度の開発．パーソナリティ研究，Vol. 16，No. 1，pp. 36-46.

Atkins, D., Skull, A. K., and Cooper, N. R. (2016). Culture shapes empathic responses to physical and social pain. *Emotion*, Vol. 16, No. 5, pp. 587-601.

Batson, C. D. (2009). These things called empathy: Eight related but distinct phenomena. In J. Decety and W. Ickes (eds.), *The social neuroscience of empathy* (pp. 3-15). Boston Review.

Batson, C. D., Klein, T. R., Highberger, L., and Shaw, L. L. (1995). Immorality from empathy-induced altruism: When compassion and justice conflict. *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 68, No. 6, pp. 1042-1054.

ブルーム，P.，高橋洋（訳）（2022）．反共感論―社会はいかに判断を誤るか―．集英社新書．（Bloom, P. (2016). *Against empathy: The case for rational compassion*. Oxford University Press.）

Cassels, T. G., Chan, S., and Chung, W. (2010). The role of culture in affective empathy: Cultural and bicultural differences. *Journal of Cognition and Culture*, Vol. 10, Nos. 3-4, pp. 309-326.

Chopik, W. J., O' Brien, E., and Konrath, S. H. (2017). Differences in empathic concern and perspective taking across 63 countries. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, Vol. 48, No. 1, pp. 23-38.

Dungan, J. A., Munguia Gomez, D. M., and Epley, N. (2022). Too reluctant to reach out: receiving social support is more positive than expressers expect. *Psychological Science*, Vol. 33, No. 8, pp. 1300-1312.

Epley, N., Kumar, A., Dungan, J., and Echelbarger, M. (2023). A prosociality paradox: How miscalibrated social cognition creates a misplaced barrier to prosocial action. *Current Directions in Psychological Science*, Vol. 32, No. 1, pp. 33-41.

藤原佳典・杉原陽子・新開省二（2005）．ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響 地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義．日本公衆衛生雑誌，Vol. 52，No. 4，pp. 293-307.

Goetz, J. L., Keltner, D., and Simon-Thomas, E. (2010). Compassion: An evolutionary analysis and empirical review. *Psychological Bulletin*, Vol. 136, No. 3, pp. 351-351.

Gray, K. (2012). The power of good intentions: Perceived benevolence soothes pain, increases pleasure, and improves taste. *Social Psychological and Personality Science*, Vol. 3, No. 5, pp. 639-645.

橋本博文・前田楓・山崎梨花子・佐藤剛介（2023）．ヘルプマーク利用者に対する援助意図の促進因および抑制因の検討．

社会心理学研究，Vol. 39，No. 2，pp. 97-106.
一言英文・新谷優・松見淳子（2008）．自己の利益と他者のコスト―心理的負債の日米間比較研究―．感情心理学研究，Vol. 16，No. 1，pp. 3-24.
Imada, T. (2012). Cultural narratives of individualism and collectivism: A content analysis of textbook stories in the United States and Japan. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, Vol. 43, No. 4, pp. 576-591.
JR西日本（2014）．平成26年度のイチオシはブログ！「マナーって思いやり。」を通じてマナー向上に取り組みます。. https://www.westjr.co.jp/press/article/2014/03/page_5436.html.（閲覧日：2025年1月30日）
唐澤真弓・平林秀美（2013）．思いやりの文化的基盤―就学前教育にみる他者理解の比較文化的研究―．東京女子大学比較文化研究所紀要，Vol. 74，pp. 65-92.
木田千裕・矢田尚也・池上知子（2023）．社会的支配志向性が身体障害者に対する支援的態度に及ぼす影響．社会心理学研究，Vol. 39，No. 2，pp. 87-96.
Koo, M., Jung, S., Palmeira, M., and Kim, K. (2023). The timing of help: Receiving help toward the end (vs. beginning) undermines psychological ownership and subjective well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 124, No. 4, pp. 772-795.
Lim, D. and DeSteno, D. (2023). Guilt underlies compassion among those who have suffered adversity. *Emotion*, Vol. 23, No. 3, pp. 613-621.
満野史子・三浦香苗（2010）．大学生の思いやり行動躊躇と対人関係特性の関連．昭和女子大学生活心理研究所紀要，Vol. 12，pp. 75-85.
Miyagawa, Y., Tóth-Király, I., Knox, M. C., Taniguchi, J., and Niiya, Y. (2022). Development of the Japanese version of the State Self-Compassion Scale (SSCS-J). *Frontiers in Psychology*, Vol. 12, 779318.
文部科学省（2017）．小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　特別の教科　道徳編．https://www.mext.go.jp/content/220221-mxt_kyoiku02-100002180_002.pdf.（閲覧日：2025年1月30日）
文部科学省（2022）．令和3年社会生活基本調査 生活時間及び生活行動に関する結果．https://www.stat.go.jp/data/shakai/2021/pdf/gaiyoua.pdf.（閲覧日：2025年1月30日）
Nadler, A. (2020). *Social psychology of helping relations: Solidarity and hierarchy*. John Wiley & Sons.
中尾央（2015）．共感・共感的配慮と道徳性．心理学評論，Vol. 58，No. 2，pp. 236-248.
Ng, H. K. S. and Cheung, S. H. (2023). Too hot to help or too cold to care?: On the links between ambient temperature, volunteerism, and civic engagement. *British Journal of Psychology*, Vol. 114, No. 4, pp. 945-968.
新谷優（2020）．助け合いの文化心理学．心理学評論，Vol. 63，No. 3，pp. 329-345.
Niiya, Y., Handron, C., and Markus, H. R. (2022). Will this help be helpful?: Giving aid to strangers in the United States and Japan. *Frontiers in Psychology*, Vol. 12, 784858.
小川翔大（2011）．他者からの同情によって生じる感情―出来事の原因帰属と相手との親密さによる感情の違い―．教育心理学研究，Vol. 59，No. 3，pp. 267-277.
小川翔大（2014）．慰め研究の概観と展望―「慰めをする人」と「慰めを受ける人」の視点から―．学校教育学研究論集，Vol. 30，pp. 33-47.
小川翔大（2022）．障害者に対する顕在的・潜在的態度が身体障害学生との友人関係に及ぼす影響―混合研究法を用いた交流過程の分析―．発達心理学研究，Vol. 33，No. 3，pp. 123-136.
小野寺敦子（2003）．親になることによる自己概念の変化．発達心理学研究，Vol. 14，No. 2，pp. 180-190.
妹尾香織・高木修（2003）．援助行動経験が援助者自身に与える効果―地域で活動するボランティアに見られる援助成果―．社会心理学研究，Vol. 18，No. 2，pp. 106-118.
妹尾香織・高木修（2004）．高齢者の援助行動経験と心理・社会的幸福・安寧感との関連．心理学研究，Vol. 75，No. 5，pp. 428-434.
妹尾香織（2008）．若者におけるボランティア活動とその経験効果．花園大学社会福祉学部研究紀要，Vol. 16，pp. 35-42.
Small, D. A. and Loewenstein, G. (2003). Helping a victim or helping the victim: Altruism and identifiability. *Journal of Risk and Uncertainty*, Vol. 26, pp. 5-16.
竹部成崇（2021）．なぜ貧しい人ほど寄付をするのか―金銭的欠乏感と利他的動機づけが寄付意図に及ぼす影響―．コミュニケーション文化論集：大妻女子大学コミュニケーション文化学会機関誌，Vol. 19，pp. 23-54.
Tee, E. Y. and binti Raja Reza Shah, R. I. A. (2023). Self-transcendent emotions and their influence on organizational effectiveness: A literature review and synthesis. *Asian Journal of Social Psychology*, Vol. 26, No. 1, pp. 146-163.
内田由紀子・北山忍（2001）．思いやり尺度の作成と妥当性の検討．心理学研究，Vol. 72，No. 4，pp. 275-282.
浦光弘（1992）．セレクション社会心理学8 支えあう人と人―ソーシャルサポートの心理学―．サイエンス社.
Weiner, B., Graham, S., and Chandler, C. (1982). Pity, anger, and guilt: An attributional analysis. *Personality and Social Psychology Bulletin*, Vol. 8, No. 2, pp. 226-232.
山本晶友・樋口匡貴（2020）．同情と感謝―助け合いを支える二つの感情の機能と陥穽―．心理学評論，Vol. 63，No. 3，pp. 242-258.
山本陽一（2018）．ボランティア体験が中学生と高校生のボランティア活動意欲に及ぼす影響．応用心理学研究，Vol. 44，No. 1，pp. 21-33.

受稿日：2025年3月10日
受理日：2025年4月7日
発行日：2025年6月30日

Copyright © 2025 Society for Science and Technology

This article is licensed under a Creative Commons [Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International] license.

https://doi.org/10.11425/sst.14.59